

人間学を学ぶ月刊誌

[chichi]

昭和51年8月16日 第三種郵便物認可
令和元年11月1日発行 毎月1回1日発行 通巻第533号

2019 December

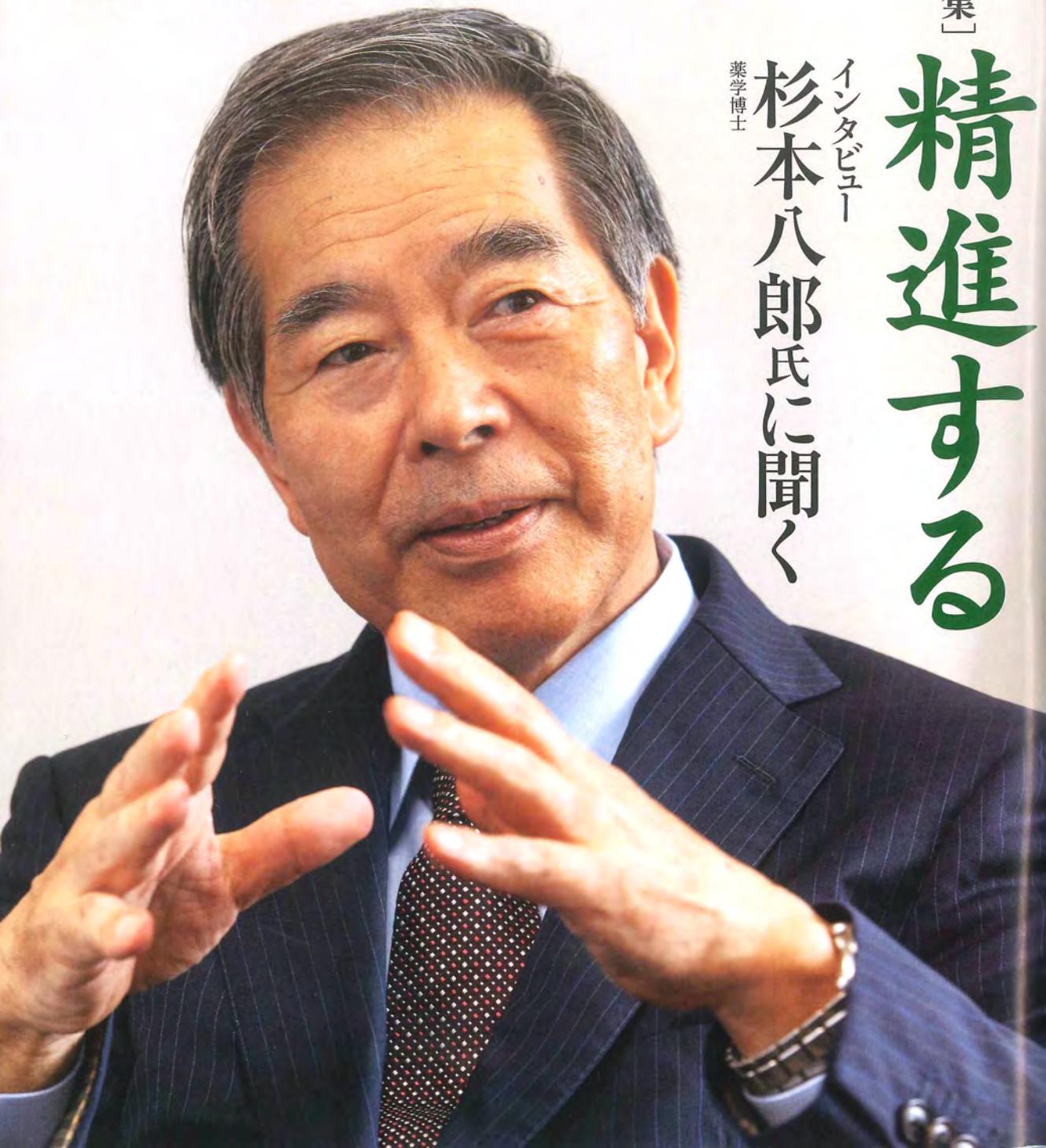
12

致知

〔特集〕

杉本八郎氏に聞く
インタビュー
薬学博士

精進する



致

か 應

想、

題字・三井住友銀行元会長小山五郎氏

伊佐拓哲（ジェイ・ワークアウトCEO）

杉浦孝宣（NPO法人高卒支援会理事長）

齋藤幸一（アップライジング社長）

小泉博明（文京学院大学外国語学部教授／総合研究所長）
石津堅（石津事務所三代目番頭）

回復に限界はない

伊佐拓哲

忘れもない、あの事故が起きたのは二〇〇二年、大學三年生の時でした。参加したアスレチック競技で私は大玉の受け止めに失敗、ドスンという音と共に吹き飛ばされ、我に返ると下半身が全く動かなくなっていたのです。

精密検査の結果、医師から告げられたのは脊髄損傷。車いす生活は避けられないとの

ことでした。覚悟はしていたものの、いざりハビリが始まる予想以上に足の麻痺は重く、「自分は社会で生きていけるのだろうか」という不安が日増しに募っていました。

そうした中で転機となつたのは、米国に障害の回復を専門にした施設があるという噂です。そこで、二人で方法を考えた結果、渡辺自らがProject Walk社へ入社。私の担当トレーナーのもと限界まで「再歩行」のトレーニングに没頭する脊髄損傷者たち。日本では考えられない熱気溢れる光景に、

うど現地に留学していた親友の渡辺淳を頼りに、藁にも縋る思いで渡米したのです。渡辺の付き添いで見学の機会を得たProject Walk社の施設は、まさに世界最先端のものでした。

私も実際に三週間の体験プログラムを受講してみたのですが、「これを続けければ歩けるかも知れない」と直感し、将

来に希望が湧いてきました。

したのが、脊髄損傷者専門のトレーニングジム「ジェイ・ワークアウト」です。

ただ、最初は人脈も資金もう思ひ立ち、二人で方法を考えた結果、渡辺自らがProject Walk社へ入社。私の担当トレーナーになることで、共にノウハウを学んでいました。

二年半後、私は補助具を使用の上、スタッフのサポートを得ての歩行ができるまで回復しました。そして二〇〇七年、米国外では初となる暖簾分けの許可をいただいて設立

のリハビリと違い、充分に動く部位だけでなく麻痺した部分へも積極的にアプローチします。脳と脊髄に歩行のパターンを再教育するトレーニングや、歩行に必要な筋肉を全身につけるトレーニングなどを並行して行い、段階的に再歩行を実現していくのです。

東京・豊洲（よす）へスタジオを移転したのは三年後のことでした。アクセスが向上したことで遠方から来られる方も増え、事業は徐々に軌道に乗っていきましたが、その中でも忘れられない出逢いがあります。

その青年は私と同年代、同じくらいの障害程度でしたが、家族四人掛かりで連れられてきました。彼は再び歩くことを諦めていませんでしたが、その障害の重さから自立は難しいと感じているように見受けられました。そこで私は、彼の前で実際に自立に必要なノウハウを思い切りやってみせました。諦めずトレーニングすれば、回復はできる。そう感じた彼は、トレーニングに打ち込み始めたのです。



以降彼は十年間通い続け、いまでは一人で外出できるほど回復し、以前とは見違えるほど前向きに毎日を送っています。再歩行を諦めない姿勢が他の脊髄損傷者的心に火を点け、回復の連鎖が始まつていく。私は自分たちの事業の大きさを強く感じました。

また「二〇一五年までに、百名の脊髄損傷者を歩かせる!!」という渡辺の思いのもと、「KNOW NO LIMIT（回復に限界はない）」というイベントにも注力してきました。子供から大人まで、トレーニングに励む皆様に、いま抱いている夢、そして自力で踏み出す姿を観客の前で披露してもらうのです。二〇一〇年には、プロ車いすテニスプレーヤーの国枝慎吾選手が十七年ぶりに再歩行したことが話題となり、多くの感動を呼びました。

しかしその一週間後、まさにこれからという時でした。マラソン大会へ出掛けている渡辺が走行中に転倒、心筋梗塞のため二十九歳の若さで亡くなってしまったのです。

突然の別れに茫然自失しましたが、落ち込んでいる暇はありませんでした。当時百名余りのクライアントを抱えており、否応なく今後の経営判断を迫られたからです。

そんな私を支えてくれたのは、共にトレーニングに励んできたスタッフと、そのスタッフに信頼を置いてくださるクライアントの皆様でした。

「俺たちが、淳の言っていた百名になろう！」と背中を押し

つて不登校やひきこもりの子供たちを支援してきましたが、

活動を続けるにつれ確信して

いることがあります。それは

不登校やひきこもりはほぼ治

すことができ、「ひきこもりゼロ」の社会は決して不可能で

はないということです。

当会は一九八五年に進路未

定者のための学習塾・学力会

に端を発し、二〇一〇年から

はNPO法人高卒支援会とし

て活動をしています。十代の

不登校やひきこもりを抱える

家庭から相談を受けて個人に

合わせた進路を提案し、ひき

こもりの場合などは自宅訪問

から始めます。

ここで重要なのは親と子の

間に立つ第三者の存在ですが、

当会では子供と歳の近い高校

生インターンや若いスタッフ

が担っています。高校生イン

ターンは当会の卒業生で、そ

れは子供が自立して社会貢献

ができるまでの支援の一環にもなっているのです。

当会が支援に取り入れてい

る方法は極めてシンプルで、

子供たちが規則正しい生活を

貢献をするというものです。

致知 2019-12 88